

日本ソルフェージュ研究協議会

第12回 講演会

日本語脳とリズム感

日時：2020年5月17日(日) 14:00 開演(13:30 開場)

会場：東京藝術大学音楽学部 大講義室 5-109

講師：樋口 桂子



樋口 桂子 (ひぐち けいこ)

名古屋大学文学部卒業。東京藝術大学大学院美術研究科修士課程修了。東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程満期退学。東京藝術大学美術学部文部教官助手を経て、2020年3月まで大東文化大学国際関係学部教授。

著書に『日本人とリズム感』(青土社)、『イソップのレトリック』(勁草書房)、『メトニミーの近代』(三元社)、訳書にクリスチャン・メッツ著『エッセ・セミオティック』(勁草書房)、グループμ著『一般修辞学』(共訳、大修館書店)などがある。

●日本語脳とリズム感●

はじめは30年以上前のタクシーのできごとである。私は友人とタクシーに乗っていた。タクシーには私と私の友人と、その友人のイタリア人男性が一緒だった。この男性は今しがたローマから着いたばかりで、珍しそうに東京の街並みを眺めては、イタリア生活が長い私の友人にさかんに質問を投げかけている。

と、突然友人がケラケラと笑いだした。どうしたのかと訊ねると、イタリアからのこの客人は、タクシーのカーラジオから流れてきた都はるみの歌に、「彼女は腹でも痛いのか」と心配そうに聞いたのだという。これにはタクシーの運転手も声を上げて笑った。流れていた曲は往年の演歌のヒット曲『アンコ椿は恋の花』で、地声で絞り出すような野太い声が、ベルカントの国から来た人には驚きだったのだ。

日本人が古くから用いてきている発声法は、西洋音楽の歌い方とは少々違う。ソルフェージュの世界にいる方々は気に留めないことかもしれないが、普段からわたしたちは、喉や内臓から出て来るような息の成分も、声と捉えて意味を聞いている。いや、風や虫の音をも、何等かの情動的な意味をもった言葉として捉えようとするところがある。

日本人は人の声だけでなく、自然の中のもの音にも何かを聞き取ろうとしてきた。自然の中にあるもの音をも意味として聞き取る脳の仕組みは、どうやら日本語という言語そのものと大いにかかわっているように見える。

私はもうひとつ、日本語のリズムに特徴的なことを、上のイタリア人と私の友人との掛け合いの中に見た。私の友人の方は盛んに相槌を打つのであるが、それは頭を下に向けながらの餅つきスタイルで、しかも相槌を打つタイミングは正拍にあった。イタリア人男性の方はといえば、確かに身振り手振りの迫力はタクシーの車体を揺らさんばかりに派手なのだが、相槌はそれほど多いわけではない。それに打ったとしてもウラ拍で、それも軽く上方向に向けて打っていたのだ。

使う言語と仕草や身振りはその人の文化に大きく連なっている。いくら語学が堪能であっても、無意識のうちについて、文化のくせが出てきてしまうところがある。それぞれの文化にはそれぞれの文化に応じたリズムがある。そのリズム感は言語や音楽の中だけでなく、実生活の広い範囲に及んでいて、しかも地下水路のように身体の内側にまで張り巡らされている。それは歌謡、舞踊、韻律のある詩歌のみならず、絵画や彫刻、デザイン、装飾、といった造形芸術や、さらには文字の書き方からもその見方といった、実に広い領域にわたって刻印されていて、思わぬところでぬっと顔を出してくる。私は美学を、なかでもレトリックを表看板にしながら、タクシーのできごと以来、リズム感の違いを頭のどこかにぶら下げた。

ここでは日本人のリズム感と拍感を言語と文化の視点から見てゆくことによって、日本人のものの捉え方とリズムとの関係について、ひとつの考え方をお示しできればと考えております。

▶入場料無料

なお、正会員以外の方は以下の経費負担をお願い致します。

一般 3,000 円、学生 1,000 円、賛助会員(個人) 1,500 円

▶問い合わせ先：

日本ソルフェージュ研究協議会事務局

Tel. 090-5566-8567 (留守番電話)

E-mail : ni.sol.ken@gmail.com

<http://www.ni-sol-ken.com/index.html>

Homepage



facebook

